

# 南 支

## 軍隊生活

愛知県 原田 養一

昭和十二年十二月十二日、召集令状を手にした自分は加藤君と二人で村人の歓呼の聲に送られて住みなれたなつかしい郷里をあとに名古屋市中区第二部隊に入隊致しました。一、二週間は夢のように過ぎ、父母や弟の面会もあり、三十日の夜おそく愛知県護国神社に参拝し、桜通りを勇ましく名古屋駅に向かいました。

いつのまに集まって来たのか沢山の人の波でした。我が子そして兄弟はいるかと野戦に出発する兵士の親兄弟であった。

「兄さん元気で帰ってよ」

大声で叫ぶ妹もいた。自分の初年兵の戦友岩瀬増夫の妻もきていた。憲兵等のみている軍紀のきびしいなかであるが、妻よりの物を受け取ることが出来、お互いに嬉しく別れることができたと思えました。手旗の波のなか、いつのまにか名古屋駅に着きました。

兵隊は軍用列車に乗せられ、愛知の空をあとにし、夜汽車は彦根、京都を過ぎ大阪駅にとまりました。今年は珍しく大雪で七、八寸はあると思われました。雪のなかを一里も歩きましたが夏衣の服なので南方にでもいくようにみえました。

大阪港の三千五百屯の「六甲丸」に乗せられ、大阪市民の声や日の丸の小旗を振る国防婦人の白いたすき姿に送られました。

瀬戸内海の海を西に西に、門司、下関へと進み、九州の西海岸を南へ玄海の荒波をかきわけ進んだ。「六甲丸」は木の葉のようにゆられ、九尺四方に分隊十二人、装具があり、身動きも出来ない状態でした。

九州もみえなくなり、船は南へ南へと島一つ見えない海を何日も過ぎ、台湾がみえて来ました。その頃、海になれない自分は何日も食欲がありませんでした。長い十一日間の船旅ののち、南支香港がみえ、さらに南支第一の珠江がみえてきました。

海かと思われる河で船から上陸すると、素足の支那人ばかり、野も山も木もない、芭蕉の林で、大陸にきたように思われました。広東市外の西村に着きここが鳳八九六四部隊で、大隊長は笠柄徳一大尉でした。自分等は機関銃中隊安田中尉、教育係として田村軍曹、横井伍長、塩山兵長、田和上等兵です。

一月とはいえ南支は暑く初年兵教育がこれからつづきました。毎日が内地と同じで初年兵教育はつらい。今日一日だけは無事におわるよう毎日郷里の氏神様の方に向かって手をあわせるのであった。友達が悪くても初年兵

が叱られるなど自分の人生ではじめてでした。

十か月の軍隊生活、いよいよ自分等の帰る日が来ました。昭和十二年兵以前の者は帰ることになり、今度は七千五百屯の「コロンビヤ丸」に乗船、三隻の船団で進むと島影から敵機二機が船を目掛けてうってくる。この時に自分は二人で対空艦視に立ち、戦友の武田に弾があたり戦死されました。その時、十数人の死者も出ました。船は飛行機で護衛され長い船旅ののち、広島宇品に帰って来ました。

名古屋中部第二部隊に帰り家に帰ることが出来ました。これが南支派遣軍の第一回召集の軍隊生活の一部です。

## 私の体験

愛知県 鈴木勝美

私は昭和十八年十月二十日、二年間の陸軍少年通信兵学校教育を終わり卒業、同時に南支派遣第二十三旅団通